

年齢別サポートネットワークの構造 —援助を求める行動における2つの要因—

山西 裕美
(九州保健福祉大学)

The Difference of the Support network with ages: the Two Factors in Asking for Social Support

Hiroimi Yamanishi

本稿では、高齢者のもつ複数のサポートネットワーク全体の構造に焦点を当て、各サポート項目の類似性について分析を行った。その結果、援助を求める行動には、『有用性』と『頼みやすさ』の2つの要因があることが判明した。

65歳未満では、サポートのカテゴリーによって、親戚・友人や専門機関など、気安く利用できる有効なサポート資源が豊富である。これに対し、高齢者の場合、年齢によって社会的に規定される側面もあり、頼みやすいサポーターは近親のみに限定される。高齢者への社会保障政策を背景に、様々に提供されつつある行政や専門機関によるフォーマルなサポートも、有用とは認識されていても心理的には距離がある。

「福祉社会」下での高齢者施策では、フォーマルなサポートを充実させることだけでなく、親族・ボランティアや行政・民間のサービスなど、ニーズに応じてサポーターとサポートを気安く使い分けることのできる環境作りが必要である。

キーワード：ソーシャルサポート 高齢者 サポート選択の柔軟性

1. はじめに

日本は、65歳以上の高齢者人口割合が増加し続け、2000年（平成12年）時点で17.2%と報告されている（厚生省,2000）。高齢者人口割合の増加と同時に、高齢者世帯構成も変化している。子世代との同居率の低下と、高齢者における夫婦のみ世帯や単独世帯増加の傾向である。

この高齢社会現象を背景に、高齢者のサポートネットワーク研究も盛んに行われてきた。特に『「社会的に孤立した孤独な老人」という神話』（古谷野,1990）の存在をめぐっては、常に議論がなされてきた。都市高齢者のもつ家族・友人・近隣などの多彩なソーシャルネットワークや、そこから得られる様々なソーシャルサポートについても多く指摘されている（須田,1986 前田,1988 藤崎,1998 など）。

一見、このような高齢者のサポートネットワーク研究の成果は、「孤独な高齢者」神話と矛盾しているかのように見える。しかし、また一方で、高齢者の非親族によるコミュニケーションやサポート機能は親族より低いことも明らかにされている（前田,1992 安達,1999）。むしろ、これまでの研究成果からみても、高齢者にとっては、親族からのサポートが一番有効なのに対し、専門家やサービス機関の役割は、親族に比べれば、まだまだ小さいというのが一般的な見解といえるだろう。

以前より、ソーシャルサポート研究では、ソーシャルネットワークやサポートは「一定の社会状況のなかで、重層的に関連し合っていることを認識し、その構造を全体として確認していかねばならない」ことが指摘されてきた(小松,1986)。本稿は、日本の高齢者のもつサポートネットワークについて、個人のもつ複数のソーシャルネットワーク全体の構造に焦点を当て、考察していくことが目的である。

2. 分析視点

今日、高齢者問題は、介護保険の施行などでも顕著なように、行政レベルでも大きな社会問題として取り組まれている。平成元年に策定されたゴールドプランをうけ、平成7年度からの新ゴールドプラン、平成12年からはゴールドプラン21(「今後5か年間の高齢者保健福祉施策の方向」として、ホームヘルパー数の増員や、ショートステイ・デイサービスの設置促進など、高齢者介護のサポートシステムの増強が図られている(厚生省,2000)。

筆者が行った阪神・淡路大震災の仮設住宅居住者をめぐるソーシャルサポートネットワークの分析結果でも、高齢者の方が、65歳未満の入居者よりもサポート源がより豊かに認識されていた。65歳以上の高齢者では、行政の様々な支援施策や保健婦などの巡回等のサービスといった行政面からのフォーマルなソーシャルサポートや、民間ボランティアからのソーシャルサポートも、親族や友人というより個人的で親しい関係によるインフォーマルなサポートと必要性が類似していた。むしろ65歳未満の入居者の方が、必要と認識されるサポーターの対象は親族と友人といったインフォーマルで個人的なものに限られていた。このような事情の背景には、阪神・淡路大震災の場合、仮設住宅での独居高齢者による「孤独死」がマスメディアによく取り上げられたこともあり、特に、フォーマルなサポートが高齢者により多く提供されたという社会的要因がある(山西,1999)。

ソーシャルサポートとソーシャルネットワークについては、多くの研究者が概念定義の曖昧さを指摘してきている(小松,1986 古谷野,1991 野口,1991a/b 湯浅,1995)。しかし、ネットワークがあっても、そこからサポートがえられない場合、そのネットワークはサポートネットワークといえない(野口,1999)。

仮設住宅高齢者のケースは震災後という特殊な社会構造から生じた現象ということを考慮すると、一般的状況下では、高齢者にとって、種々のサポートが、災害時のように豊かに認識されているといえるのだろうか。今回の分析視点は、高齢社会の様々な高齢者支援の体制下において、高齢者にとって、これらのサポートがどのように位置づけられているのか、高齢者のもつ複数のサポートネットワークの全体構造に焦点を当てることである。

3. 方法と対象

(1) ソーシャルサポートの提供者・サポート項目および測定について

今回の分析にはNFR98の質問票の問30を用いる。今回の調査項目も「従来のサポート

研究における操作的定義」(野口,1991)であるところの「手段的サポート/情緒的(=表出的)サポート」の項目から構成されている。情緒的サポートとしては「(ア)問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」(以下「情緒」)の1項目が、手段的サポートとしては「(イ)急いでお金(30万円程度)を借りなければならない」(以下「お金」)・「(ウ)病気や事故で、どうしても人手が必要なとき」(以下「人手」)・「(エ)あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき」(以下「介護」)の3項目、「情緒的/手段的」合わせて計4項目である。

この(ア)から(エ)のような問題で援助や相談相手がほしいとき、頼りにするサポート提供者として、「配偶者」・「親・兄弟姉妹」・「子ども・その配偶者」(以下「子・その配偶者」)・「その他の親族」(以下、「他の親族」)・「友人や職場の同僚」(以下「友人・同僚」)・「近所(地域)の人」(以下「近所の人」)・「(行政・金融機関・家政婦など)専門家やサービス機関」(以下「専門・サービス」)・「誰もいない」の8項目がそれぞれ設定されている。回答の仕方は、複数回答のマルチ・アンサー方式である。「配偶者」から「専門・サービス」までの7項目に回答がない場合のみ8項目目の「誰もいない」が相当する。

また、これらのソーシャルサポートの提供者は、「フォーマル/インフォーマルな支援」(稲葉,1992)にならえば、「配偶者」・「親・兄弟姉妹」・「子・その配偶者」・「他の親族」・「友人・同僚」・「近所の人」はインフォーマルなサポートに対し、「専門・サービス」はフォーマルなサポートに分類できる。

従来のソーシャルサポートの研究によくみられる質・量での測定や、より綿密なニーズの把握を目指す「予期・実態・評価」(野口,1991)での測定に比べ、今回の調査ではサポートの測り方は、「頼りにする」という受け手によるサポート期待の主観的評価を測定することになり、現実にサポートを得られるかどうかではない。このことは、調査対象者のパーソナリティを反映してしまうことは免れない。サポートの有用性と個人の対人協調性との関連も報告されているが(コープこうべ,1997)、ネガティブサポートの視点やストレス対処からみたソーシャルサポートの主観的評価の有用性も考慮し、受け手の主観的評価でサポートを測定することも有意義であるといえるだろう(福田,1997)。

(2)データについて

今回用いるデータは、日本家族社会学会が、1998年12月に実施した全国家族調査(NFR)の一部である。分析では、仮設住宅の高齢者との比較において、一般状況下の年齢差によるサポートネットワーク構造の特徴を把握するため、65歳以上と65歳未満とに分けて比較検討する。“65歳未満”は、男性2,601人(47.4%)・女性2,881人(52.6%)の計5,482人である。“65歳以上”は、男性722人(48.0%)・女性781人(52.0%)の計1,503人である。なお、“65歳未満”は全体の78.5%を、“65歳以上”は21.5%であった。

4. 分析および考察：年齢区分による緊急時のサポーター

ここでは、最初の分析段階として、年齢区分ごとに提供者別サポートの有用性を比較するため、年齢とサポーターのクロス分析結果を検討する。そして次に、クロス分析だけではわからない、それぞれの年齢層における各種サポート全体の位置づけについての分析を、多次元尺度構成法によるプロットを用いておこなうことにする。

(1) 各サポート項目における年齢とサポーターのクロス分析(図-1)

(a) 「問題を抱えて、落ち込んだり混乱したとき」(情緒)

情緒的なサポートを期待する対象としては、年齢に関係なく、配偶者への回答が一番多く、いずれの年齢においても約6割を占め、特に“65歳未満”の方が多い。次に多い対象は、年齢によって異なり、“65歳未満”では「親・兄弟姉妹」が、“65歳以上”では「子・その配偶者」が4割近くをしめている。特徴的なのは、“65歳未満”で「友人・同僚」が3番目のサポートの期待対象となっていることで、「親・兄弟姉妹」とほとんど差がない。“65歳未満”においても、「友人・同僚」がこのようにサポートの期待を強くになるのは、他の手段的サポート3項目でもみられないことである。年齢が比較的若い世代では、高齢者層に比べ、情緒的サポートで、「友人・同僚」が果たす役割は大きい。

両年齢層において、近親よりは比較的遠い関係になりやすい「他の親族」や、「近所の人」・「専門・サービス」は、情緒的サポートの担い手としての認識はあまりされていない。

(b) 「急いでお金を借りるとき」(お金)

手段的サポートの中でも、30万円位のまとまったお金を借りる対象としては、年齢による状況の違いが大きく出ているといえるだろう。“65歳以上”では「子・その配偶者」への期待が1番強く、次いで「配偶者」が多い。“65歳未満”では「親・兄弟姉妹」への依存が1番大きく、次いで「配偶者」と、身近な親族へ集中している。

また、親族以外で、サポートが期待できる対象で、年齢による違いがみられるのは、「友人・同僚」では“65歳未満”の方が、「専門・サービス」では“65歳以上”の方が多くなっている。特に、“65歳以上”では経済面でのサポートを受けるには年齢的制約があるせいか、「誰もいない」が1割近くあり、他のサポート項目においてより多くなっている。

(c) 「病気や事故で人手が必要なとき」(人手)

人手という、より直接的なサポートが必要になった場合も、経済面でのサポートの場合と同じ傾向がみられる。1番サポート期待が大きい対象は、“65歳以上”ではやはり「子・その配偶者」が、“65歳未満”では「親・兄弟姉妹」が大きく、年齢によるコントラストも大きい。次いで、いずれの年齢層も「配偶者」となっている。それ以外のサポーターは、これら身近な親族に比べると、あまり期待されていないといえる。しかし、“65歳未満”

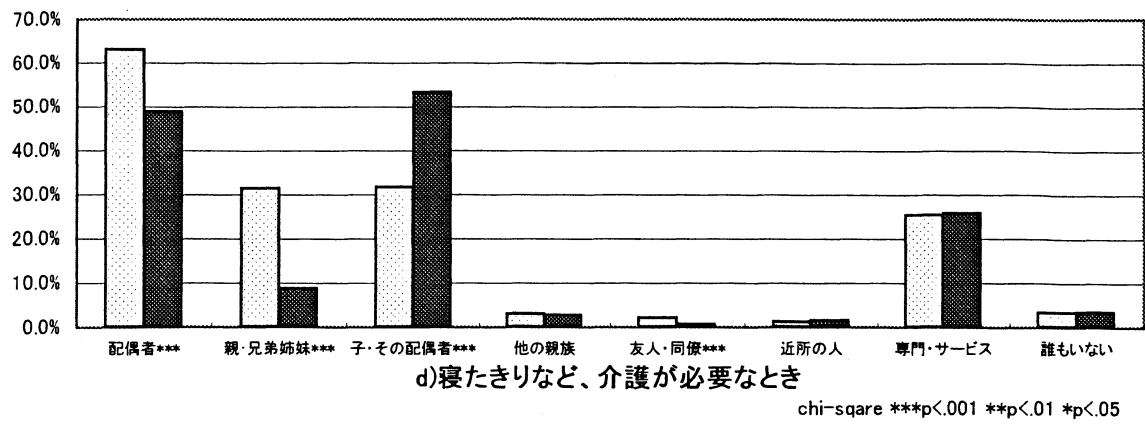
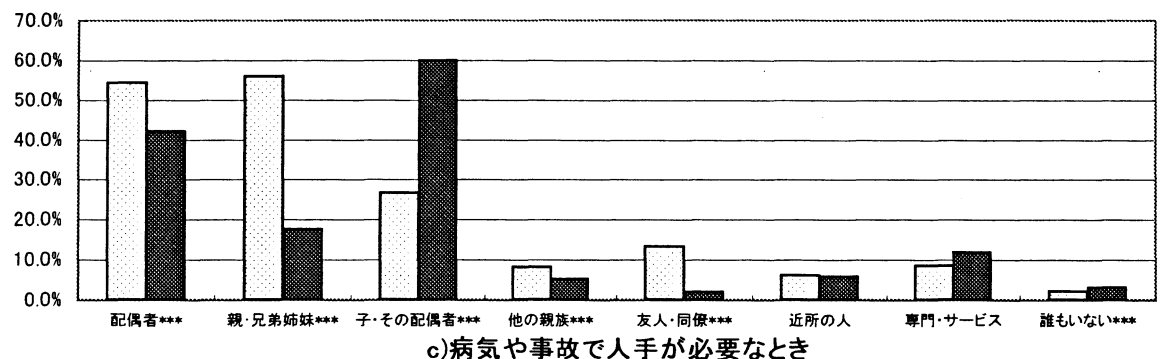
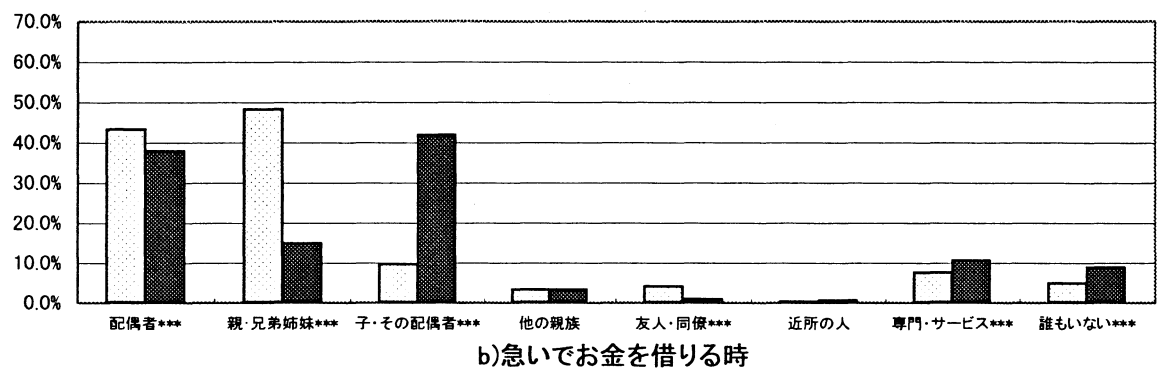
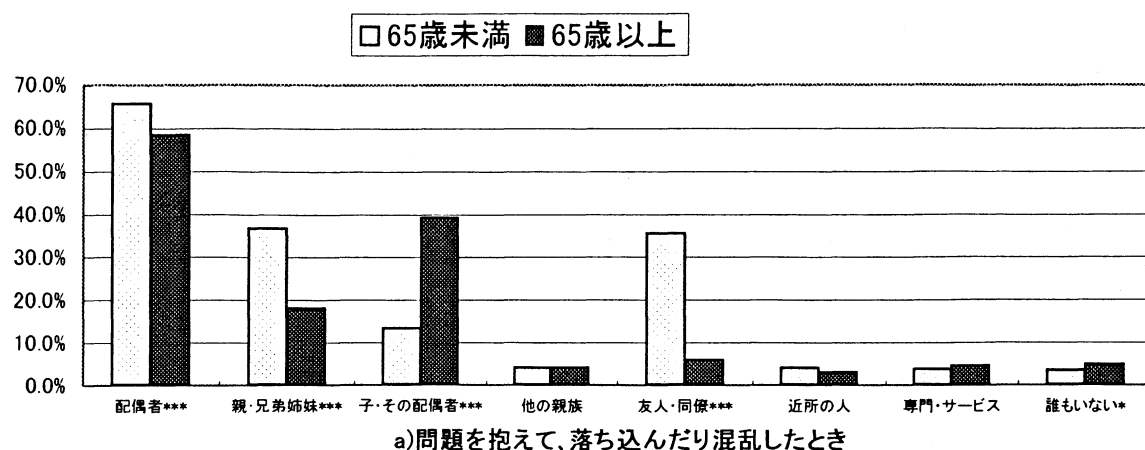


図-1.年齢別サポートの有用性

では、「友人・同僚」が「情緒」のサポートに次いでサポート期待が高くなっており、年齢による有意な差もある。比較的若い年齢層では、経済的サポートに比べ、「人手」はサポートの依頼がしやすいといえる。

(d)「寝たきりなど、介護が必要なとき」(介護)

介護が必要になった場合、“65歳以上”では、「子・その配偶者」に次いで「配偶者」が多くなっている。「人手」のサポートの場合と同様、「子・その配偶者」と「配偶者」への期待の強さは僅差となっている。“65歳未満”では「配偶者」への期待が圧倒的に多く、次いで「親・兄弟姉妹」と「子・その配偶者」が同じぐらいの期待の強さであった。いずれの年齢層でも「親・兄弟姉妹」への期待が4種類のサポートの中では一番弱い分、「専門・サービス」といった家族外部の専門機関への期待が強くなっている。「専門・サービス」は、他のサポート項目に比べると、どちらの年齢でも2割を超し、4種類のサポート項目の中で一番多くなっている。

年齢ごとの各サポート項目とサポーターとの関係をわかりやすくするため、サポート項目ごとに上位3番目までのサポーターを表に記した(表-1)。情緒的サポートの場合は、いずれの年齢層でも、「配偶者」がサポーターとして1番期待を担っている。しかし、手段的サポートの場合は、年齢による違いが顕著に表れている。“65歳未満”の場合は、「親・兄弟姉妹」への期待が大きいですが、“65歳以上”の場合は「子・その配偶者」への期待が大きくなっている。

表-1.年齢別各サポート項目に対するサポーター

順位	落ち込んだりした時の相談相手		急いでお金を借りる		病気や事故の時の人手		寝たきり時の介護	
	・64歳 (5452)	65歳・ (1473)	・64歳 (5398)	65歳・ (1445)	・64歳 (5435)	65歳・ (1480)	・64歳 (5432)	65歳・ (1486)
1	配偶者	配偶者	親・兄弟姉妹	子・その配偶者	親・兄弟姉妹	子・その配偶者	配偶者	子・その配偶者
2	親・兄弟姉妹	子・その配偶者	配偶者	配偶者	配偶者	配偶者	子・その配偶者	配偶者
3	友人・同僚	親・兄弟姉妹	子・その配偶者	親・兄弟姉妹	子・その配偶者	親・兄弟姉妹	親・兄弟姉妹	専門・サービス

身近な親族へのサポート期待が大きい中で、“65歳未満”では「友人・同僚」のサポートも無視できない位置をしめている。同様に、“65歳以上”では、頼れる親族が少なくなる中で、「専門・サービス」のサポートへの期待が伺われる。

しかし、このような各サポート項目のサポーターごとに、年齢で比較していくだけでは、先行研究がそうであったように、身近な親族によるサポートの有効性ばかりが強調されてしまう。そのため、例えば、“65歳未満”での「情緒」や「人手」のサポートでの「友人・

同僚」によるサポートの意味が、“65歳以上”では「介護」での「専門・サービス」によるサポートの意味といった、年齢層によるサポート項目や対応するサポーターの全体での意義や位置づけが把握できない。そのため、次にそれぞれの年齢層における各サポート項目間の類似性の構造をみていくことにする。

(1)年齢別各サポートへの依存の全体構造（図 2-1-2）

多次元尺度構成法により、年齢別に、4種類のサポート項目ごと、「誰もいない」を除く7種類のサポーター計28種類のサポート間における類似性について測定した。

今回のデータの取り方は、各サポーターの各サポート項目に対して、「頼る/頼らない」であったので、距離行列の計算方法は2値による方法で行った。各サポート間の非類似性尺度のマトリックスを SPSS10.0J の ALSCAL を用い、2次元空間にプロットした^{註⑩}。Stress はいずれの分析においても 0.2 以下と低く RSQ も高い。

年齢層によって各種サポートの刺激布置に違いがみられる。次元1では、どちらの年齢層でも「配偶者」・「子・その配偶者」・「親・兄弟姉妹」・「専門・サービス」が右側に位置している。“65歳未満”では、「情緒」・「人手」の「友人・同僚」と、「人手」の「他の親族」が加わっている。次元1の左側には、いずれの年齢層でも「近所の人」によるサポート4項目が位置しており、“65歳未満”では「友人・同僚」による「お金」・「介護」と、「他の親族」の「人手」を除く3項目が、“65歳以上”では「他の親族」・「近所の人」・「友人・同僚」のすべてのサポート項目が位置している。

軸の解釈は、サポートを求める対象の意思決定における潜在的な要因を抽出することである。その意味で、1次元での解釈は先のクロス表分析（図-1.）での結果とかなり共通している。すなわち、右側に各サポート項目に対し「頼る」サポーターが、左側にはあまり「頼らない」サポーターが位置している。

「配偶者」・「親・兄弟姉妹」・「子・その配偶者」はいずれの年齢層でも「頼る」割合がかなり高い対象である。「専門・サービス」も、割合はこの3項目のサポーターよりは低くなるが、それでも残りの他のサポーターに比べれば、「頼る」割合は低くない。これに対し、「友人・同僚」の「情緒」と「人手」は、“65歳未満”では「頼る」割合が比較的あり、“65歳以上”より有意に高くなっていた。「他の親族」の「人手」も、微妙な位置にはあるが、“65歳未満”において、“65歳以上”より有意に割合が高くでている項目である。

このことから、次元1の左右はサポートを「頼る」ことに対してのプラスとマイナスを示しているといえる。つまり次元1の軸は“サポート期待の強さ”であり、それはまた当事者にとってそのサポートの『有用性』にも通じるものである。

これに対し、次元2に対する各サポートの刺激の布置は、年齢層により共通している側面と、かなり異なっている側面がある。「配偶者」と「親・兄弟姉妹」のそれぞれ4種類のサポート項目は、いずれの年齢層でも、原点を中心として上側、つまり次元2の軸では

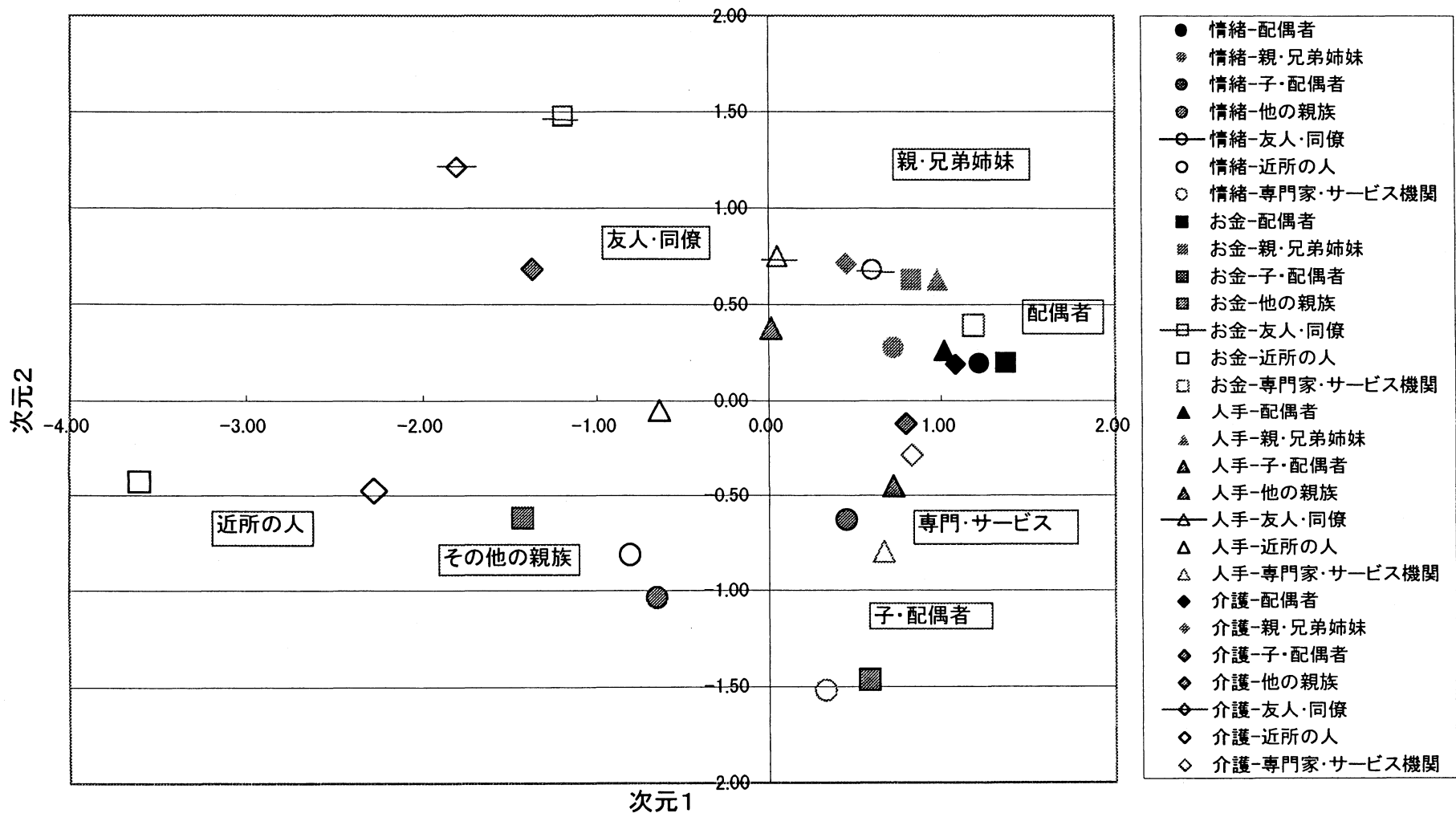


図2-1.サポートネットワークの構造(65歳未満 N=5363)
Stress=.17135 RSQ=.89238

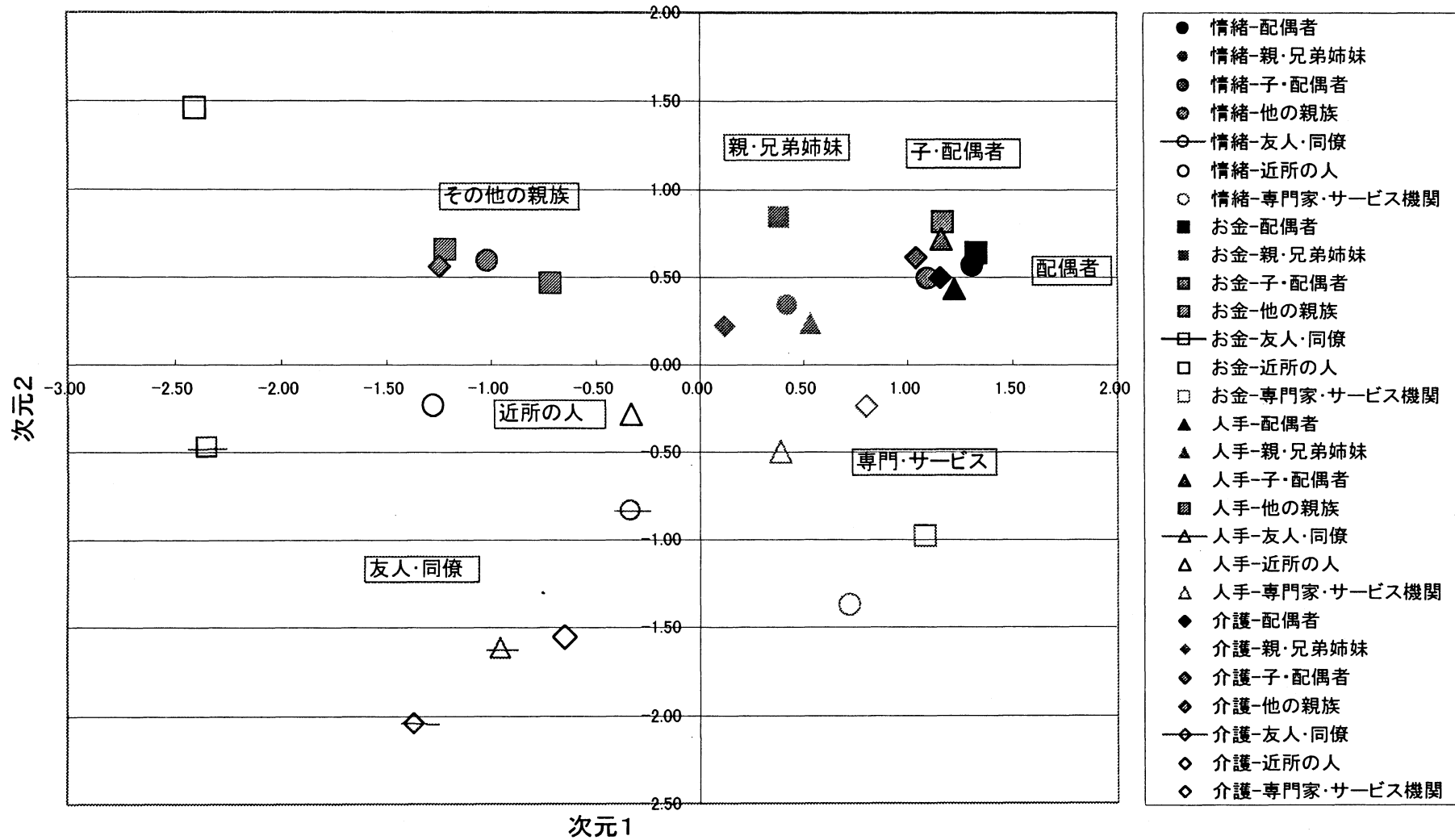


図2-2. サポートネットワークの構造 (65歳以上 N=1437)

Stress=.15193 RSQ=.90179

プラスの値をとっている。同様に、「近所の人」と「専門・サービス」も、それぞれ一部のサポート項目を除いて、原点より下側、次元2軸でマイナスの値をとっている。

しかし、「配偶者」や「友人・同僚」は、明らかに年齢層によって、次元2軸に対し、プラスとマイナスの反対の値をとっている。「他の親族」は“65歳未満”では、「人手」・「介護」がプラスで、「お金」・「情緒」がマイナスに位置しているが、“65歳以上”では4項目すべてがプラスに位置している。

年齢層ごとの次元2軸に各サポート項目の布置については、“65歳以上”では親族の項目がすべてプラス側に位置し、非親族にあたる項目がマイナス側に位置するという、大変顕著な分布を示している。“65歳未満”では、親族か否かでは、これほどはっきりした分布は示していない。「友人・同僚」のサポート項目すべてが「配偶者」や「親・兄弟姉妹」と一緒にプラス側に位置するのに対し、「子・その配偶者」がマイナス側に位置するのは、“65歳以上”と比べて年齢層による大きな違いである。

この年齢層によるかなり顕著な違いから、次元2軸は、心理的な『頼りやすさ』を表していると解釈できる。すなわち、必ずしも「役に立つ」サポートではないが、心理的な距離が近いサポート項目である。例えば、“65歳以上”にとって、年齢の関係上「友人・同僚」も高齢になるので、あまりサポーターとしてはあてにはならず、心理的距離も近くはないのだろう。「専門・サービス」も、高齢者には心理的には敷居が高いということはあるが、実際には有効な手段であるから次元1ではプラスになる。

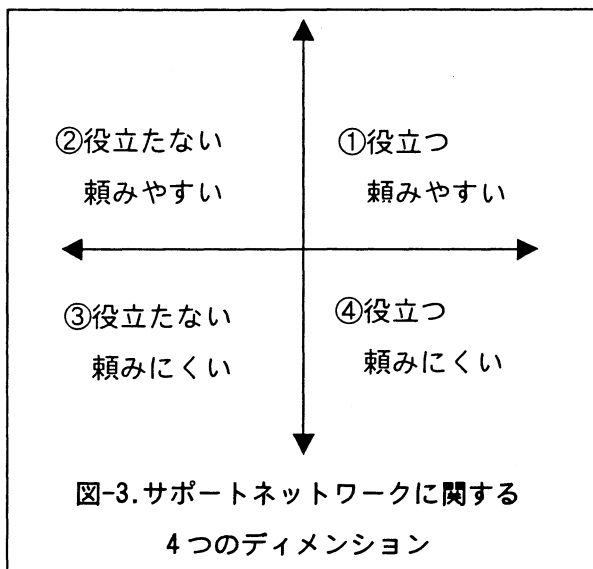
一方、65歳未満にとっては、「友人・同僚」はかなり心理的距離が近い存在である。しかも、情緒面でのサポートでは、比較的若い年齢層ではサポートとしてかなり有効である。いざという時の「人手」を「友人・同僚」に頼むのも、金銭的なこととは違って、頼みやすくしかも有効なサポートであることはクロス分析結果と同様である。「親・兄弟姉妹」の特に親からの経済的サポートを受けることはもとより、「専門・サービス」も有効なサポート資源であるが、なかでも経済的なサポートは、銀行で住宅ローンを組むなどの融資は日常的なことであるから、心理的にも距離が近いサポートであることがわかる。

しかし、「配偶者」や「親・兄弟姉妹」にはサポートを頼みやすくても、「子・その配偶者」を当てにするには、まだ年齢的に若すぎるのであろう。そのため、「子・その配偶者」は有効なサポート資源だが、親としてはあまり頼みたくないサポーターといえる。この年齢層は、「友人・同僚」の各サポートや「専門・サービス」の経済的サポートなどに恵まれる分、「他の親族」に対しては、「人手」・「介護」のような手間のかかるサポート以外は、当てにしていないようである。

以上の結果から、サポートを求める行動の要因に2つの因子があることが分かった。1つはそのサポートが役に立つかという『有用性』であり、2つめは心理的距離である『頼みやすさ』である。そして、各サポーターによる各サポート項目は2*2の4つのディメンションをもつことになる(図・3)。1番サポートとして理想なのは、第1象限(①)であり、

第4象限(④)も有効なサポートを得るという点では十分意義がある。

この観点から、年齢層による各サポートを求める行動の特徴は、以下のようにまとめることができる。65歳以上では、“サポーターのカテゴリー”ごとに凝集している。しかも、サポーターの対象を近親とフォーマルなサポートにほぼ限定している。援助を求める行動がネットワークの特質によって著しく影響を受けることが社会福祉実践との関連で指摘されている(小松,1986)。従来、えることのできるサポートは、個人の資源と認識されている。しかし今回の分析結果は、高齢者にとって、サポートを求めること自体に、本人の高齢化にともない、社会構造上規定される側面があるということを示す。例えば、他の親族や友人・



同僚の年齢も上がること、また銀行ローンが組めないといった現象である。そのため、本人の意図に関わらず、『サポート選択範囲の狭さ』が必然的にともなうことが分かる。

これに対して、65歳未満では、「配偶者」・「親・兄弟姉妹」を除き、“サポートのカテゴリー”ごとに分布している。友人・同僚から情緒的サポートや手伝いをえる一方で、専門のサービス機関からお金を借りる。あまり近くない親戚にも手伝ってもらうといった動きかたである。これは比較的若い年齢層では、サポート資源も豊富で、『サポート選択の柔軟性』があるということであろう。

5. まとめにかえて

年齢層によるサポートネットワーク類似性の構造についてみてきた。高齢者のサポートネットワークの大きな特徴としてわかったのは、やはり高齢者の有効なサポート源の少なさである。社会構造上規定される側面が大きいにしても、心理的にも親族へ集中している。先行研究の結果とは反するが、2種類の分析結果から、友人によるサポートもそれほど期待されているとはいえない。

同様に、検証の一つの課題であった「孤独な高齢者」神話については、災害時の高齢者への社会的関心が高い時とは異なり、今回の一般状況下における分析では、親族とそれ以外のサポート間の類似性はあまり大きいとはいえない。高齢者のこのサポート選択の対象が限られていることについては、高齢者の性別・地域規模の両要因で、さらに分析してもあまり違いが見られなかった^{注②}。このことから、高齢者のサポート資源に融通性がないことは、性別や住んでいる地域などの要因に関わらず、高齢者のおかれた環境上、一般的

問題と考えられる。

しかし、有効性としては、専門家やサービス機関といったソーシャルサポートも認識されていることがわかった。特に、人手や介護に関する項目では、サポート依存への心理的距離は、親族にかなり近い。冒頭に述べたように、現在の社会保障施策は、高齢者へのソーシャルサポート体制の強化が図られている。この調査の実施された時点は、介護保険開始以前であるが、介護保険の趣旨である在宅介護支援からみれば、今回の分析結果は、親族によるサポートに心理的には頼りながら、うまくフォーマルなソーシャルサポートを取り入れていく可能性が伺われる。

むしろ、比較的若い年齢層の方が、サポートニーズに応じて気安く利用できる対象を色々もっているようである。NFR98 基礎分析結果では、年齢の増加に従い、サポートの期待対象が親世代から子世代へと変化することが指摘されている(日本家族社会学会,2000)。しかし、少子高齢社会においては、高齢者も親族だけでなく、その他のソーシャルサポートへのニーズをもっと顕在化させ利用することによって、心理的にも距離を近づけるなど、個人的なインフォーマルなサポートだけでなく、フォーマルなサポートも第1象限へと変化させていくことによって選択の幅を広げていくことができるだろう。

現在、日本では、ヨーロッパ諸国同様、国による福祉の供給だけでなく、民間企業や家族・ボランティアなどがいずれもが福祉の供給者となり社会を支えていく“福祉多元主義”が目指されている。その点でも、今後の高齢者施策では、フォーマルなサポートを充実させることだけでなく、より身近なサポート資源として発展していくことが課題であると同時に、若い年齢層のように、親族・ボランティアや行政・民間のサービスといった、ニーズに応じて色々なサポーターとサポートを使い分けることのできる環境作りが望まれる。

また、この「福祉社会」への福祉供給システム理念の変化は、施設への収容からコミュニティケアへのシフトにも影響を与えている。しかし、今回の分析では、地域の人々は、どちらの年齢層においても、殆どサポート源として認識されていない。介護保険の施行など、在宅による地域ケア主体の政策の中では、コミュニティへの過大な信頼を見直し、この地域社会の人間関係のあり方も再構築していかなければならないだろう。

注①多次元尺度構成法は、各刺激の類似性の布置を測る方法なので座標値は相対的である。そのため、各年齢層で比較が容易になるよう、「配偶者」が同じ象限に位置するように軸に回転をかけている。しかし各布置間の距離には影響がないので、分析としては支障ない。

注②高齢者のサポートネットワークの構造を性別で分けた場合、女性の方が「子・その配偶者」において、男性よりサポートの期待が強い。また、地域規模別に分けた場合、町

村が都市より「子・その配偶者」への期待が強い。しかし、どちらの分析でも、それ以外のサポーターでは違いがみられなかった。

参考文献

- 安達正嗣,1999,『高齢期家族の社会学』,世界思想社,
- 稲葉昭英,1992,「ソーシャル・サポート研究の展開と問題」,『家族研究年報』17, p67-78
- 岡本彬訓,1994,『パソコン多次元尺度構成法』,共立出版
- 厚生省,2000,『平成12年版 厚生白書』,ぎょうせい
- コープこうべ・生協研究機構,1997,『避難生活からの復興とコミュニティ形成に向けて』, p97-111
- 小松源助,1986,「社会福祉実践における社会的支援ネットワークアプローチの展開」,『社会福祉の現代的展開』,勁草書房, p223-239
- 古谷野亘,1990,「在宅要援護老人のソーシャル・サポート」,『桃山学院大学社会学論集』24(2), p113-123
- 1991,「社会的ネットワーク」,『老年社会科学』13, p68-76
- 須田木綿子,1986,「大都市地域における男子一人暮らし老人の Social Network に関する研究」,『社会老年学』24, p36-51
- 日本家族社会学会,2000,『家族生活についての全国調査 (NFR98)-(1)』
- 野口裕二,1991a,「高齢者のソーシャルサポート:その概念と測定」,『社会老年学』34, p37-48
- 1991b,「高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート—友人、近隣、親戚関係の世帯類型別分析」,『老年社会科学』13, p89-105
- 1999,「サポートネットワーク」,『福祉社会事典』,弘文堂, p358-359
- 福西勇夫,1997,「ストレス対処からみたソーシャルサポート」,『現代のエスプリ ソーシャルサポート』,至文堂 p20-29
- 藤崎宏子,1998,『高齢者・家族・社会的ネットワーク』,培風館
- 前田尚子,1988,「老年期の友人関係」,『社会老年学』28, p58-70
- 東京大学出版会,1992,『新老年学』
- 山西裕美,1999,「阪神・淡路大震災における仮設住宅居住者をめぐるサポートネットワークの構造」,『長寿社会研究所・家庭問題研究所 研究年報第4巻』,(財)兵庫県長寿社会研究機構, p65-74
- 湯浅典人,1995,「ソーシャル・サポートに焦点をあてた援助についての考察」,『社会福祉学』36-1, p72-86

(2001年5月23日提出)

文部省科学研究費基盤研究（A）：10301010

家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No. 2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査（NFR）研究会